

二言語環境に育つ中国語を母語とする 小・中学生の中国語と日本語の関係 —会話力の場合—

穆 紅

1. はじめに

近年、日本の公立学校に在籍している日本語以外の言語を母語とする子どもたちが急増している。そのうち、多くの子どもは、教科学習の理解困難、母語の弱体化などさまざまな困難を直面している。

このような子どもをサポートするために現場ではさまざまな支援活動が展開されている。その中で子どもの日本語の習得だけに注目し、「母語はできるから喪失することはない」という声をよく耳にする。一方、バイリンガズム理論などの知見に示唆され、近年では子どもの母語を日本語教育に取り上げた視点や、言語学習と教科学習を統合した視点が提唱されている（野山 1992、岡崎 1997 等）。そこで、このような子どもたちに対してよりよい支援を行うためには、子どもの母語と第二言語能力を関連付けて言語能力を総合的に捉えることが必要であろう。

2. 先行研究

2.1 二言語相互依存仮説

Cummins は、二つの言語は別々に存在し発達するのではなく、お互いに依存し合って発達するという「二言語の相互依存仮説」を提唱し、その考え方を氷山に喩えて説明した。二言語の音声、統語、表記などの表面層は、異なるように見えるが、しかし、氷山の深層では、抽象的思考力とメタ言語能力などの共有基底言語能力を有していると主張している。

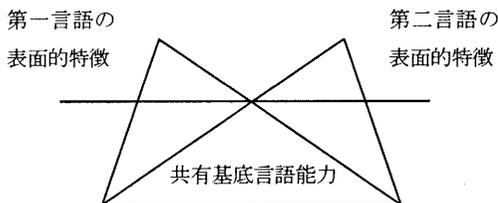


図1 二言語能力の氷山のたとえ
(Cummins&Swain 1986:83 より作成)

2.2 二言語能力に関する実証的研究

Cummins の「二言語相互依存仮説」をめぐる実証的な研究が数多く行われている。

生田 (2001) は、ブラジル人中学生を対象に作文タスクを実施した。ブラジル語と日本語の間では、作文の「産出量」「語彙の多様性」「文章の構成」において相関があるという結果を得ている。

また、読解と会話力については、Cummins&中島 (1985) は、トロントの日本人海外子女を対象に学力言語テストと会話力テストを実施した。分析の結果、英語と日本語の間では、読解力と会話力の「対話面」と「認知面」において相関があることを報告している。

これらの先行研究から、母語で獲得した能力が、第二言語で生かされるという「二言語相互依存仮説」を支持する結果が出ている。

3. 研究課題

本研究は、日本の公立学校に在籍する中国語を母語とする子どもの会話力に焦点を当て、子どもたちの中国語と第二言語である日本語の関係を探ることを目的とする。

研究課題：中国語と日本語の会話力の間には相関関係は見られるか。

4. 研究方法

4.1 対象者

今回の調査は、東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県で行われ、公立小・中学校に在籍する中国語を母語とする生徒 52 名とその保護者 49 名から協力を得た。52 名のうち、小学生は 25 名、中学生は 27 名である。中国出身は 50 名、台湾出身は 2 名である。調査時の平均年齢は、12 才 3 ヶ月、平均入国年齢は、8 才 7 ヶ月、平均滞在年数は、3 年 4 ヶ月

である。

4.2 調査材料

今回の調査に使用した材料は、OBC 会話テストと質問調査紙である。

4.2.1 OBC 会話テスト (Oral Proficiency Assessment for Bilingual Children)

OBC 会話テストは、中国語を母語とする子どもを対象に実施した。

OBC 会話テストとは、バイリンガル環境で育つ年少者のためにカナダ日本語教育振興会により開発された個人インタビュー・テストである。多様なバイリンガルの会話力を知るために、会話力を「基礎言語面」「対話面」「認知面」の三面に分けて測定するようにできている。今回の調査では、OBC 会話テストの日本語版と中国語版を使用した。

OBC 会話テストは、「導入会話」、「基礎タスク」、「対話タスク」と「認知タスク」から成り立っている。「導入会話」は、初対面の自然な会話であり、大体の会話力のレベルをチェックするものである。「基礎タスク」は、言語知識を調べるための文型中心の応答で、テストの質問に答える形式である。「対話タスク」は、ロールプレイを通して、子どもが必要に応じて会話を切り出し、情報を得、会話を締めくくることができるかを見るものである。「認知タスク」は、場面から離れてどのぐらい認知力、思考力を使って、お話や自分の意見を話せるか、また内容に見合った語彙の選択や、話にまとまりがあるかを見るものである。

4.2.2 質問紙

質問調査紙は、子どもや父母の属性、家庭での言語生活・言語学習の実態について子どもの保護者を対象として調査を行った。これは、朱 (2002) の質問項目を参照して修正を入れて使用した。

4.3 調査の手続き

今回の調査は、日本語母語話者、且つ日本語教育経験者の1名から協力を得、筆者とそれぞれ日本語と中国語のインタビューを実施した。

練習効果を避け、子どもの負担を軽減するため、調査は、基本的に3日間以上を空けて2回に分けて実施した。1回目のときは、得意な言語からインタビューを行い、同時に質問調査紙を渡し保護者に回

答してもらうように頼む。そして、2回目のときは、もう一方の言語でインタビューを行い、また配布した質問紙を回収する。

一回のインタビューは、約15分を目安に行った。

4.4 OBC 会話テストの評価

会話の評価は、OBC 会話テストの評価方法に沿って、「量的評価」「質的評価」「総合判定」の3つの方法で行った。

まず、テストの流れに沿って、テストの質問に答えたかどうか、タスクがこなせたかどうかを量的に評価する。質問に答えられたら1点、答えられなかったら0点をつける。

次に、会話の質を「基礎言語面」「対話面」「認知面」の3つに分けて、5・3・1の三段階で質的に評価する。5点は上(よくできる)、3点は中(普通)、1点は下(ぎりぎり)である。

最後に、量的評価と質的評価の結果を踏まえて、二言語能力は総合的にどのレベルにあるかを判定する。

日本語の評価は、日本語母語話者、且つ日本語教育経験者の協力者2名が実施し、中国語の評価は、中国語母語話者の協力者1名と筆者が実施した。それぞれの言語は、まず2人の評価者で20件のデータを評価した。2人の評価の一致率をピアソン相関係数で計測したところ、高い相関があったため、2人で同じ基準で評価したことを判断した。中国語と日本語の各々における一致率の結果を表1に示す。

表1 二言語評価の一致率 (n=20)

	総合判定	量的評価	質的評価	基礎面	対話面	認知面
日本語	0.85	0.87	0.93	0.80	0.82	0.84
中国語	0.89	0.97	0.97	0.95	0.88	0.94

5. 分析の結果と考察

(1) 二言語間の相関関係

中国語と日本語の二言語能力を総合判定、量的評価、質的評価、または質的評価の下位項目である基礎言語面、対話面と認知面において二言語の間に相関関係があるかをピアソン相関係数で求めた。

表2 二言語能力間の相関関係 (n=52)

総合判定	量的評価	質的評価	質的評価		
			基礎面	対話面	認知面
0.478**	0.585**	0.525**	0.163	0.583**	0.649**

*p<.05,**p<.01

その結果、質的評価の基礎言語面を除くすべての評価項目において有意な正の相関関係が見られた。

(2)「基礎言語面」「対話面」「認知面」の下位項目具体的に、どの側面において中国語と日本語の間に相関関係があるかを見るため、基礎言語面、対話面および認知面の下位評価項目ごとの相関係数を計測した。

表3 基礎言語面、対話面、認知面の下位評価項目における二言語間の相関関係 (n=52)

基礎言語面				
発音	必要な語彙の使用	文の生成	文法的正確度	文のタイプ・質
-0.158	0.264	0.175	0.070	0.176
対話面				
聴解力	会話への参加態度	対話の流暢度	話体・敬体の使用	
-0.061	0.487**	0.251	0.505**	
認知面				
話のまとまり	内容の豊富さ	語彙の質	段落とその質	
0.476**	0.482**	0.572**	0.582**	

*p<.05,**p<.01

その結果、基礎言語面の下位評価項目、および対話面の「聴解力」「対話の流暢度」においては、二言語能力の間には有意な相関関係が見られなかった。しかし、対話面の「会話への参加態度」「話体・敬体の使用」、および認知面のすべての評価項目において、有意な正の相関関係が見られた。

(3) 二言語の認知面の関係

さらに、中国語と日本語の認知面の関係を分析するために、重回帰分析を2回行い、一方の言語の認知能力によってもう一方の言語の認知能力を予測

することができるかを調べた。

1 回目は、中国語認知面の得点を目的変数とし、入国年齢、滞在年数と日本語の認知面の得点を予測変数とした。そして、2 回目は、日本語認知面の得点を目的変数とし、入国年齢、滞在年数と中国語認知面の得点を予測変数とした。

2 回の重回帰分析ともステップワイズ法を使用して、1 回目では、滞在年数と日本語認知能力を選択し、2 回目では、入国年齢、滞在年数と中国語認知能力の3つの変数を全部選択した。

表4 中国語認知面・日本語認知面をそれぞれ目的変数とした重回帰分析の結果 (n=52)

目的変数	予測変数	t 値	Pr> t	標準偏重回帰係数
中国語認知面	滞在年数	-4.79	<.001	-0.431**
	日本語認知面	6.83	<.001	0.614**
日本語認知面	入国年齢	2.34	0.024	0.356*
	滞在年数	3.57	<.001	0.548**
	中国語認知面	6.60	<.001	0.747**

*p<.05,**p<.01,

重回帰分析の結果、中国語認知面と日本語の認知面において有意であったため、一方の言語の認知能力によって、もう一方の言語の認知能力を予測することができることが分かった。

OBC 会話テストを使用して二言語能力の関係を分析した Cummins&中島(1985)は、英語と日本語、朱(2002)は、韓国語と日本語の「対話面」と「認知面」において相関関係があることを指摘している。本研究では、中国語と日本語においても同様に「対話面」の二つの項目と「認知面」において相関関係があることから、日本語と中国語のような文法構造のまったく異なる二言語の間にも、「基礎面」を除いて相関関係があること、また、会話力にも認知的な側面があり、その側面において二言語の間で相関関係があることが示唆された。

6. 今後の課題

今後、子どもたちの二言語能力の関係をより適切に把握するために、調査人数を増やし、二言語環境で育つ子どもたちの全体的な状況を反映するような研究が必要だと考える。

また、会話力だけではなく、認知力のより必要な作文力・読解力を含める総合的な言語能力を調べることを今後の課題としたい。

注

1. 朱(2002)は、国立国語研究所(1997)と Cummins&中島(1995)を参照して作成している。

参照文献

Cummins,J.&中島和子(1985)「トロント補習校小学生の二言語能力の構造」『バイリンガル・バイカルチュラル教育の現状と課題—在外・帰国子女教育を中心として—』東京学芸大学海外子女教育センター,143-179
 Cummins,J. & Swain,M.(1986)*Bilingualism in Education*. NY:Longman.
 カナダ日本語教育振興会(2002)「子どもの会話力の見方と評価—バイリンガル会話テスト(OBC)の開発—」(凡人社販売)
 岡崎敏雄(1997)「日本語・母語相互育成学習のねらい」『平成8年度外国人児童生徒指導資料母国語に

よる学習のための教材」茨城県教育庁指導課, 1-7
 朱睨淑(2002)「韓国語・日本語の二言語環境にいる韓国人児童の二言語能力—母語の保持・発達を中心に—」(未公刊)お茶の水女子大学修士論文
 中島和子(2001)『日本語獲得と継承語喪失のダイナミクス—日本の小・中学校のポルトガル語話者の実態を踏まえて』
<http://www.colorado.edu/ealld/atj/SIG/heritage>
 野山広(1992)「在日外国人児童・生徒への日本語教育に対する多文化教育的一考察」『日本語教育論集』9,35-66 国立国語研究所日本語教育センター
 生田裕子(2002)「ブラジル人中学生の第1言語能力と第2言語能力の関係—作文のタスクを通して—」『世界の日本語教育』12,63-77
 河野麻衣子(2004)「二言語併用環境下の年少者の作文における母語と日本語の関係—中国語を母語とする中学生を対象に—」(未公刊)お茶の水女子大学修士論文

む ほん／お茶の水女子大学大学院 応用日本言語論講座
 muhong42@yahoo.co.jp

稿末資料1 OBC 会話テストの質的評価

基礎言語面	1	発音〔自然な発音(単音、イントネーション)で話せる〕
	2	語彙〔必要な語彙が使える〕
	3	文の生成〔自分で文が作れる〕
	4	文法的正確度〔文法的に正しく話せる〕
	5	文のタイプ・質〔簡単な文型ばかりでなく、複雑な文型も使える〕
対話面	6	聴解力〔テストの発話・質問が理解できる〕
	7	会話への参加態度〔積極的に会話へ参加しようとする〕
	8	対話の流暢度〔テストとのやり取りがスムーズである〕
	9	話体・敬体〔「です・ます」「だ体」の区別、丁寧な表現が使える〕
認知面	10	話のまとまり〔筋の通った話、理由、説明、意見が言える〕
	11	内容の豊富さ〔話、理由、説明、意見などの内容が豊かである〕
	12	語彙の質〔内容に見合った語彙を選択して使える〕
	13	段落とその質〔文の切れ目がはっきりし、段落に対する意識がはっきりしている〕

稿末資料2 OBC 会話テストの総合判定

レベル1	言葉による応答が困難、質問の単純反復・沈黙・首振りまたは「はい」／「いいえ」だけで応答、単語レベルの応答がほとんどである。
レベル2	2語レベルで最低限度のコミュニケーションができる。
レベル3	単文レベルで応答が可能であるが、語順、その他の文法面の習得が不十分、日本語の場合は動詞、形容詞の活用、助詞の選択などに問題がある。
レベル4	対話のやり取りがスムーズで、その滑らかさにおいてはネイティブレベルに近づく。日常的な内容の会話なら、多少間違いがあってもかなりこなせる。しかし、認知要求度の高いタスクはまだ十分にこなせない。
レベル5	認知面タスクもこなせるようになる。
レベル6	社会性が増して相手への配慮、丁寧度意識が加わる。